

巻頭言

「山場」を迎えるジェネリック医薬品使用促進

今年6月、日本ジェネリック医薬品学会 第5回学術大会は、東日本大震災の直後にもかかわらず、皆様のご理解やご協力により無事に終了することができました。

「～ジェネリック医薬品、次のステージに向けて～」のテーマに合わせ、学会本来の品質などの学術的分野から、ジェネリック医薬品の使用促進の鍵となる、流通や薬価制度、診療報酬、医薬分業に関する議論や、さらに、東日本大震災での体験を踏まえての災害対策時の医薬品供給などについても、提案や議論をすることができました。

改めて、各位のご協力に感謝申し上げます。

さて、ご承知の通り、明年2012年は、我が国がジェネリック医薬品使用促進の使用目標として掲げてきた、数量ベース30%の達成を実現する重要な年であります。

厚生労働省や私たち日本ジェネリック医薬品学会などの関係者が、今日まで進めてきた方策や努力が、首尾よく成果をもたらすことができるのか楽しみでもあります。

日本ジェネリック医薬品学会の歴史は、まさしく我が国のジェネリック医薬品使用促進の歴史でもあります。

そのことから言えば、明年30%目標値を達成することができれば、日本ジェネリック医薬品学会もまた所期の目的（の一部）を達成することになると思われ、さらに、その存在意義を社会から改めて認められることにもなると考えます。

私たちは、そもそも学会として、ジェネリック医薬品が我が国の医療の中に普及・定着するために、さまざまな視点から科学的に調査したり研究したりするものであって、数量的な達成を目標に掲げているわけではありませんが、普及という視点からは、目標が達成できれば素直に嬉しいと思います。

10月には、日本ジェネリック医薬品学会の活動の一環として、今年も「政策提言」を取り纏め、関係者に提言など説明をさせていただきました。

私たちの「政策提言」の内容が関係者により生かされ、実施されることにより、ジェネリック医薬品の当面の使用目標である30%達成に、少しでも役立つならば、日本ジェネリック医薬品学会としては、望外の喜びと思われませんが、大切なことは、私たち自身が「政策提言」の内容を実行する当事者であることと考えます。

平成24年度を、実りのある年にするために、日本ジェネリック医薬品学会は、関係者とともに、さらに大きなパワーを発揮しようではありませんか。

2011年12月

日本ジェネリック医薬品学会理事

漆 畑 稔